

単純未来形と迂言的未来形

渡邊 淳也

(筑波大学)

本発表では、単純未来形 (*futur simple*) と迂言的未来形 (*futur périphrastique*) の機能を比較しながら論じ、つぎのような点を主張する。

- 1) 単純未来形は、発話時点から断絶した未来時に視点をおき、動詞のあらゆる事行 (*procès*) をその未来時に直接または間接に位置づける機能を果たす。発話時点と未来時をへだてる断絶は、単純未来形が含む不定法形態素 *r* によってもたらされるものであり、文脈的要素としては、共起する時間副詞の制約によって証明される。
- 2) 迂言的未来形は、事行の実現にむけての準備段階を発話時点に位置づけるとともに、発話時点からの連続性のなかに事行を直接または間接に位置づける機能を果たす。発話時点からの連続性は、移動動詞 *aller* が示す漸進性によってもたらされる。このことを裏づける言語事象としては、*peu à peu* などの徐徐たる増進をあらゆる副詞句と迂言的未来形との親和性がとくに高いことがあげられる。
- 3) 単純未来形の機能は、分岐的時間 (*temps ramifié*) の表象をもちいて図式化できる。分岐的時間とは、時間の進展につれて、さまざまに異なる可能世界 (*mondes possibles*) へと枝わかれする形で想定される時間の表象である。それとは対照的に、迂言的未来形は直線的時間 (*temps linéaire*) によって図式化できる。両者の相違は、否定とのかかわりにおいて明確になる。通常否定になじみやすいのは、肯定と否定が分岐によってあらかじめ前提されている単純未来形であり、迂言的未来形の否定は外部否定 (論争的否定) にかぎられる。
- 4) 単純未来形のモダールな諸用法は、叙想的時制 (*temps de dicto*) の事例である。動詞があらゆる事行そのものではなく、事態の確認や、想定される発言など、事行をなんらかの形でとらえなおしたものを未来時に位置づけていると考えることで説明できる。
- 5) 迂言的未来形のモダールな諸用法のうちの一部は、漸進性の図式から直接的に説明できる。「異常なふるまい」という意味効果は、不可避性へのマイナス評価という文化的要因にも負っている。また、性癖をあらゆる用法については、習慣としてとらえなおされた事行を位置づけているという意味で、叙想的時制とみなすことができる。